

『北方部隊の朝鮮人兵士-日本陸軍に
動員された植民地の青年たち』
(現代企画室、2014年3月) を刊行して

北原道子



3月に本を出した。何人かで共同で翻訳出版したり論文を書いたり、ということはあっても、一冊の本を自分で書いて出すのは生まれて初めてのことだ。

戦争中の話である。樺太と千島と北海道の旧日本陸軍部隊に兵士として動員された朝鮮人について、随時『在日朝鮮人史研究』に書いたものをまとめた。

なぜ、このテーマだったか。はっきり自覚して始めたことではなかったが、振り返ると自分の中にそれなりの必然があったのかもしれないと思う。朝鮮語を学び始めたのが70年代初め。가나다를覚えて半年くらいで韓国へ行った。「むくげの会」に通い始めた頃だ。1973年1月末から2月にかけて、覚えのない韓国語で尋ね尋ね釜山、慶州、浦項、大邱、ソウル、板門店、木浦、馬山を巡る旅に出た。朴正熙政権の独裁下で人々の暮らしは貧しかったが、厳しい時代を生き抜こうとするエネルギーで情の篤い韓国の人々に魅了された。朝鮮民族の個性の強さに圧倒された。後に朝鮮の歴史を学びながら、私のなかに芽生えた疑問は、日本の植民地政策の基本であった皇民化政策をあのように民族的な意思の強い人々になぜ強いたのか、ということだった。今思えば、皇民化が受入れがたいものだったからこそ、民族的な抵抗は強固であったのだと言えるのだが…。このようなテーマに取り組み続けたのはそんな疑問が根底にあったからかも知れない。

直接的には、札幌に住んでいた90年代の初め頃。当時、参加していた「札幌郷土を掘る会」で北海道の兵

士動員数の調査をするという話が出た時に、朝鮮人もいたのではないかと発言したことがきっかけとなった。朝鮮人兵士のことを聞きに、日本人の軍隊経験者を紹介してもらって会いに行った。初めての聞き取り。一人は関東軍での、もう一人は北海道から九州に移動した第77師団での話。徴兵で来た人と志願兵で動員された人の印象が大きく違った、徴兵で来た人は兵隊に向くとはとても思えなかったと話してくれた。

東京に戻ってからだったと思うが、樋口雄一さんに手紙を書いた。一面識もないのに何をどう調べたいのか、相談に乗っていただいた。樋口さんは北海道新聞に戦友会の案内が載っているの、部隊に朝鮮人がいたかどうか、手紙で問い合わせてみたらどうか、と提案してくださった。札幌でお会いした朴慶植先生から在日朝鮮人運動史研究会に誘っていただいて会に顔を出すようになった。

こうして私の勉強はスタートした。

東京の防衛省防衛研究所の図書館にも通った。北海道関係の陸軍部隊の文書から調べようと思った。戦史、部隊史も随分読んだ。とても読みにくかった。まず、軍隊用語がわからない。どんな部隊があるのかもわからない。そもそも「日本軍部隊」や「戦闘」に関する記述は読んでいて楽しくない。体が受けつけなかった。戦争に対する評価も戦争を体験した人たちとは違っていることが多々あった。戦争に対する嫌悪感。

樋口さんが提案してくださった戦友会へのアンケートの成果はそれなりに集まってきた。北海道まで出かけて行って話を聞かせてもらったこともある。部隊の名簿をコピーして送ってくれた方もある。何度か手紙のやりとりをしたり、電話をかけたこともした。日本人の戦争体験者には、朝鮮人兵士の存在が結構しっかり刻まれているという印象が残った。それは必ずしも差別感に満ちたようなものばかりではなく、特に学徒動員で来た人たちについては能力についても人柄についても高い評価を聞かされた。

だが、成果はそんなに大きくなかった。砂粒をひとつ、ふたつと拾うような感覚が残った。

最初の転機は、学徒兵経験者の呉昌禄さんに会いにサハリンへ出かけたことから訪れた。在日研で樺太の朝鮮人兵士動員について報告をした際だったか、どうして日本人ばかりに話を聞いて、当事者の朝鮮人に聞きにいかないのか、という指摘を受けた。李恢成さん

が主宰されていた『民済』誌に掲載された朴亨柱『サハリンからのレポート』に、学徒兵経験者の話が出ている、と教えてくださったのは崔碩義さんである。つてを辿ってサハリン行きが実現し、呉昌禄さんにインタビューすることができた。研究会で背中を押してもらったのだ。

もうひとつの転機は、韓国で樺太・千島・北海道部隊の朝鮮人の「第五方面軍留守名簿」を閲覧できたことだった。「留守名簿」は1993年、盧泰愚大統領の要請により、日本政府が韓国政府に渡した動員関係資料の一つである。本来は「外地」に動員された部隊の家族への連絡のための日本陸軍軍人軍属の部隊別名簿である。朝鮮人の「留守名簿」は、敗戦後、そこから朝鮮人を抜き出し「内地」部隊などを追加したものである。徴集年・本籍・家族などのほか、戦死・不明状況・靖国合祀・供託金についても記載されている。

「留守名簿」は厚生労働省が所蔵しているが、個人情報保護を理由に一般には公開していない。防衛研究所の図書館で樺太でのソ連戦の資料を調べるうちに、戦後北海道庁が部隊名簿と「留守名簿」を元に朝鮮人の戦死者の調査をしていることがわかり、ぜひ見たいと思っていた。

「名簿」をどう使うかかなり悩んだが、とりあえずパソコンにデータとして入力してみることにした。軍人と軍属計600名ほどの名簿で、一人で入力できるかと躊躇した。と書くとともに恥ずかしい限りだが、後に、何万という朝鮮人の軍人軍属死亡者やシベリア抑留死亡者の入力をされた、菊池英昭さんや村山常雄さんのお仕事があることも知った。私はパソコンに強いわけではない。どこまでも手探りしながらの作業であった。一旦データ入力さえしておけば分析、分類が容易にできることも知った。

この間、韓国政府に植民地下の強制動員の实態調査と被害者の支援のための委員会ができて、さまざまな報告書や聞き書き集が刊行された。軍人軍属に関するものは多くはなかったが、手に入るようになった。ただ、聞き書き集は兵士動員されたハラボジたちの話で、方言やお年寄り独特の言い回しなど私にはとても難しい。それでもそれまで集めた事実の裏打ちには欠かせなかった。さらに私自身が直接、韓国人の体験者の話を聞きく機会にも恵まれた。裴始美さんという優れた通訳、研究者を得て（彼女自身が少年飛行兵、特攻体験者の

聞き取りをし、論文と聞き書き集をまとめている）貴重な聞き取りをすることができた。少年戦車兵として北千島占守島に送られ、戦後サハリンで抑留生活を送った李貞圭さんに話を聞いたのもこのときのことだ。

こうして、話を聞かせてもらい、資料を調べ、書きまとめたものを本にすることができた。

本にするにあたってどうしてもこだわりたいことがあった。「朝鮮人兵士動員」をどう位置付けるかである。難しい課題だったが、日本のために戦ってくれたなどという勝手な決めつけだけはされては困る。そのために長い導入部を設けた。兵士動員の全体が理解でき、朝鮮人にとって何を意味するものだったのか、そのことが植民地政策が何だったかの解明に繋がることを期した。

朝鮮人兵士動員は、朝鮮半島の将来を担うはずだった植民地の若者たちに大きな犠牲を強いた。軍属を含め2万名もの死亡犠牲者を生んだ。かつて、金英達さんは、こう断じた。「反抗すれば命を失う植民地統治下の皇民化政策のまやかしによって、数十万の朝鮮青年が軍人・軍属として戦場に送り込まれて犠牲になった（しかも、侵略戦争に加担するという立場において）という歴史の事実は深刻である。民族史の傷痕として残るものだ」。解放後の朝鮮半島は東西冷戦の影響をまろに受け、分断された。日本政府によって戦後補償は切り捨てられ、今も解決されていない。戦死した朝鮮人は靖国神社に合祀され、取り消すことさえできない。「青年たち」は、未だに植民地支配の呪縛から解放されていないのだ。生き残って帰った人々にも大きな禍根を残した。歴史の闇の中へ埋没させないためにも、こうした声を少しでもすくい上げられたらという思いが形になった。

※本の購入は、著者に直接注文していただくと有り難いです。定価は2800円+税ですが、著者としてまとめて購入しましたので2500円（送料一部込）でお分けします。

郵便番号・住所・氏名・電話番号・部数を明記の上、dojako@m20.alpha-net.ne.jp までお申し込みください。